

奨励賞

未来への鍵は、隣にいる仲間

私が人権について初めて考えるきっかけになったのは、小学校低学年のときのことです。

私のクラスには、特別学級に通っている友達がいました。普段は別の教室で勉強していますが、図工や音楽、国語の一部など、受けられる授業のときには私たちと同じ教室に来ていました。その子はいつも静かに入ってきて、先生に小さくあいさつをしてから、自分の机へ向かっていました。

その机は、教室の端に置かれた、大きな段ボールで作られた小さな家の中にありました。初めて見たとき、私は「なんだか不思議だな」と思いました。友達と目を合わせて首をかしげたことも覚えています。

段ボールハウスは、段ボールを組み合わせて作られた小屋のような形で、机の上には教科書やノートがきちんと並べられ、その子は落ち着いた様子で授業を受けていました。時々、先生に質問するときは扉を開けて、静かな声で話していました。

私は最初、「秘密基地みたいでいいな」と思いました。

クラスの誰もそれをからかったり、笑ったりはしませんでした。羨ましそうにのぞく子もいれば、ただ見守っている子もいました。「あの子はこういう勉強の仕方をしているんだ」というふうに、みんなが自然に受け入れていました。私もそれが特別なことだとは思わず、当たり前のように感じていました。

中学生になった今、あの出来事を思い返すと、その段ボールは、その子にとって安心して学べる大切な場所だったのだと分かります。みんなと同じ教室にいながら、自分のペースで授業を受けられる環境。それは、その子の「学ぶ権利」を守るための工夫だったのだと思います。

そして、クラスの誰もそれを変だと思わず、自然に受け入れていたことは、とても大切なことだったと気づきました。もしあのとき、誰かが笑ったり否定したりしていたら、その子はきっと居心地の悪さを感じ、授業にも集中できなかっただろう。そのとき、その子はどうなってしまったのだろうと気が気でないです。

世の中全体が、その当時のクラスのように、違いを自然に受け入れられる場所になってほしいと思います。その理想を実現するためには、まず私自身が、相手の立場や気持ちを想像し、一人ひとりの個性や価値観を尊重する姿勢を持つことが何よりも大切だと考えています。

最近、部活動に新しく入部した仲間が入ってきたとき、分からぬことをすぐに質問できない様子を見て、できるだけ声をかけるように心がけました。その第一歩は、相手の立場に立ち、その気持ちを想像しました。同じ部活の友達からも

新しく入部した仲間とたくさん話していました。そのおかげで、新しい仲間は少しづつ部活動に馴染んでいき、今では、みんな楽しく、充実した部活動に取り組めています。

この経験から、私は、誰もが安心して過ごせる環境をつくるために、自分にできることを少しづつ見つけて、行動していきたいと強く思うようになりました。それは、困っている人に声をかけたり、相手の意見を尊重することかもしれません。たとえ小さな一歩でも、その一歩が、誰かの居場所を守り、より良い社会へと繋がっていく信じています。

私たちは皆、それぞれの違いを持った、かけがえのない存在です。だからこそ、互いを認め合い、尊重し合うことで、誰もが安心して自分らしくいられる社会を築いていく必要があるのです。私はこれからも、目の前にいる一人ひとりを大切にしながら、多様性を受け入れる社会の実現に貢献していきたいです。